様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１２３３

研究課題名（和文）聴覚障害学生の成長過程に応じた情報保障のあり方に関する実践的研究

研究課題名（英文）A Practical Study of Access Service for Deaf and/or Hard-of-Hearing Students Based on their Stages of Growth

研究代表者
金澤　貴之（KANAZAWA, Takayuki）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：５０３２３３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚障害学生のエンパワメントを促進する情報保障のあり方を提案すべく，個々の学生の成長過程を踏まえつつ，以下の実践的検討を行った。1)小型表示端末を用いた情報保障。２）音声認識字幕による英語の情報保障。３）聴覚障害学生自身による情報保障ニーズの検討および発表。４）教育実習における聴覚障害学生の障害認識の変化に関する検討。これらの検討から，①情報保障の「気づき」に応じた支援の導入，②学習権の保障のための充実した情報保障の提供，③就労移行に向けた，学生自らの選択による情報保障の吟味，の各段階にあわせた適切な支援の工夫の重要性が確認された。

研究成果の概要（英文）：To optimize testing access services aimed at empowering hearing-impaired students, we implemented and studied the following, based on the growth process of each student: 1) utilizing a mobile-type remote captioning system access service; 2) utilizing a real-time English captioning system access service that uses automatic speech recognition technology; 3) investigating and presenting of access service needs by the students themselves; and 4) investigating changes in impairment self-awareness by the students from practicing as a teacher. We confirmed the importance of finding ways to provide appropriate access services for the students with the following three targets in mind: (1) introducing support in response to “noticing” a need of an access service; (2) provision of a full complement of access services in order to ensure students’ right to learn; and (3) selections of appropriate types of access services made by the students themselves for transition to employment.

研究分野：社会科学

キーワード：障害認識　情報保障　エンパワメント　聴覚障害　高等教育　障害学生支援　小型表示端末　音声認識

１．研究開始当初の背景

高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生は近年増加傾向にあり，彼らのための修学支援は全国的に整いつつあるが，個々の学生のニーズに合わせた方法については試行錯誤の段階にあり，特に障害認識の変化に対応した支援方法については端緒についたところである。

２．研究の目的

聴覚障害学生のエンパワメントを促進する情報保障のあり方を提案すべく，聴覚障害学生の４年間の学生生活を通した障害認識の変化に注目し，卒業後の社会参加への移行を踏まえた種々の情報保障手段の使い分けを実践的に検討する。

３．研究の方法

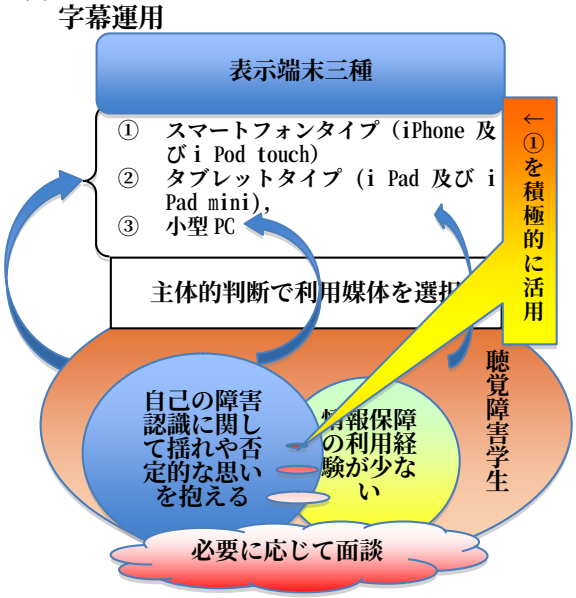
聴覚障害学生の障害認識の変化に対応した支援方法について，①否定的な障害認識に配慮した小型表示端末の活用，②音声認識技術の活用等による修学権保障の実現，③手話通訳と文字通訳の併用による参加型授業での発言権の保障，④情報保障が困難な状況での手段の本人選択といった観点から利用学生の障害認識の変化を検証することとした。

具体的には，以下の７つについて実践及び検討を行った。

(1)障害認識に配慮した小型表示端末による字幕運用
(2)音声認識を用いた字幕呈示運用による英語の情報保障
(3)聴覚障害学生自身による情報保障の必要性のアピール
(4)聴覚障害学生支援の体制が整備されている大学における実態調査
(5)個々の聴覚障害学生の障害認識の変化に関する事例検討
(6)仮説モデルの検討
(7)仮説モデルを踏まえての実践

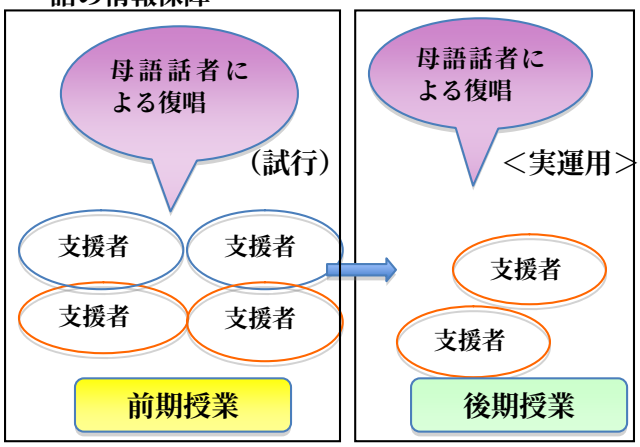
４．研究成果

(1)障害認識に配慮した小型表示端末による字幕運用



情報保障に抵抗感をもつ，教室内で目立ちたくない，といった学生に，学生自身に選択可能な形で３種類の小型携帯端末を用意した。特に，自己の障害，情報保障に対してアンビバレントな感情を抱く学生に対しては，目立たないスマートフォンタイプ機の積極的な活用を行った。その結果，情報保障への心理的抵抗が高い状態である学生の障害認識に配慮しつつ，意識の変化を促すことができた。

(2)音声認識を用いた字幕呈示運用による英語の情報保障



従来は困難であった英語の話し言葉による授業へのアクセスが可能になった

復唱・修正作業を要すると考えられてきた音声認識による字幕運用が，母語話者による英語の音声については復唱を介さずとも十分実用に耐えうる高い認識精度を維持できることを確認した。

しかしながら，恒常的な運用を行っていくためには，授業の合間の 10 分間でセッティングを実現させるべく，時間短縮を図る必要があるなどの課題が残された。

(3)聴覚障害学生自身による情報保障の必要性のアピール

PEPNet-Japan シンポジウム実践事例コンテストにおいて，自らの情報保障のあり方について聴覚障害学生自身がアピールする機会を設けた。発表という機会に向け，各々の聴覚障害学生が自己の障害認識を内省する機会を得たこと，そして当事者での立場から他者に自己の問題を説明するという，障害認識を外在化させる作業を行ったことで，各々が，自己の障害をより肯定的にとらえられるようになっていった。

(4) 聴覚障害学生支援の体制が整備されている大学における実態調査

PEPNet-Japan 連携大学を中心に，聴覚障害学生支援の体制が整備されている大学３校を訪問し，聴覚障害学生の障害認識に対応した支援の働き方の工夫について，聞き取り調査を行った。その結果，情報保障への心理的抵抗への配慮など，関わり方の配慮の工夫

は見られるものの，個々の聴覚障害学生の成長過程に応じて，用いる情報保障の方法を工夫する様子までは見られなかった。

(5) 個々の聴覚障害学生の障害認識の変化に関する事例検討

G 大学教育学部における教育実習の特殊性に注目し，実習への取り組みを通した障害認識の変化と，情報保障についての意識の変化について分析を行った。

大学での講義とは異なる，通常学校での教育実習への準備を進める中，能動的に情報を得ていこうとする心理面の変化が見られた。

実習においては，聴覚障害学生自身の要望・選択によって，場面に応じて手話通訳と筆談を切り替える，授業を行う際の情報保障の手段をその都度変えていく，などの工夫が見られた。

(6)仮説モデル**目次のエントリが見つかりませんでした。**の検討

(1)～(5)の実践を踏まえ，下図１，２の通り仮説モデルを作成した。

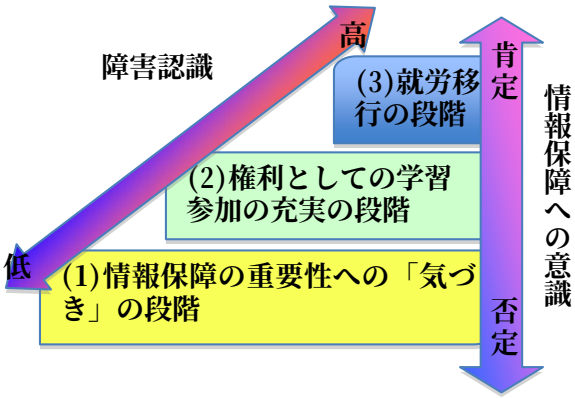


図１　障害認識の変化及び情報保障への意識と各段階

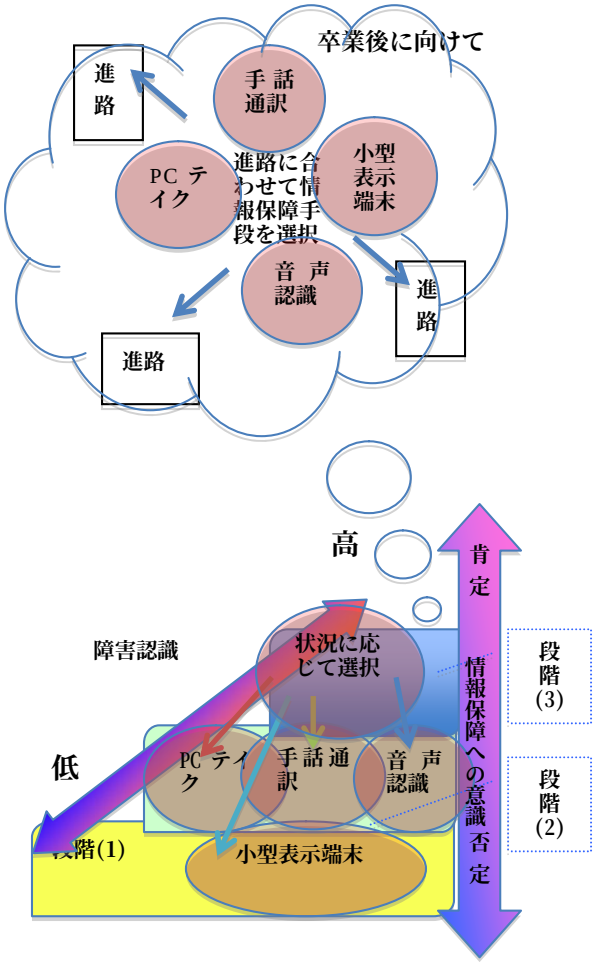


図２　障害認識の変化に対応した情報保障手段の呈示

(7)仮説モデルを踏まえての検討

① 遠隔地からの情報保障

研修旅行内のバス移動において，試行的に，T-Tac Caption を用いて遠隔地からの情報保障の運用を行った。（仮説モデル：段階(1)）

② 情報保障手段の内省的な比較検討

入学後に PC テイクを運用しつつ,手話を習得した聴覚障害学生に対し,非公式の論文検討会を利用して，FM 補聴器，PC テイク，手話通訳，の手段の併用による内省的な比較検討を行った。（仮説モデル：段階(2)）

③ 卒業後の社会参加を踏まえた情報保障

a) 主体的な発言の確保の方法についての検討：上記⑥の大学 4 年生の聴覚障害学生に対しての情報保障において，ゼミの参加学生同士での相互手話通訳によって情報保障を行い，その中で主体的な発言の確保の方法について検討を行った。（仮説モデル：段階(2)・(3)）

b) 病院での看護実習における，難聴学生への合理的配慮のあり方：

（仮説モデル：段階(3)）

④ 情報保障を通じて学生自身のエンパワメントを促進させる実践

a) 聾学生による聴学生のための PC テイクの実施：手話で行われる大学 1 年生向けの授業において，大学 2 年生の聾学生が聴学生のために PC テイクを実施することにより，障害の相対性への気づきを促した。（仮説モデル：段階(1)）

b) 通常学校卒業生と聾学校卒業生との交流：通常学校を卒業した聴覚障害学生と，聾学校を卒業した聴覚障害学生とが交流を行った。交流を通して，通常学校出身の聴覚障害学生の手話の必要性への認識が高まった。（仮説モデル：段階(3)）

c) 全国的シンポジウムにおける聴覚障害学生自身の発表：支援の多様性を経験する中で，障害認識が肯定的に変化していくありようについて，全国的なシンポジウムの場において，聴覚障害学生自身が発表を行った。（仮説モデル：段階(3)）

⑤ 総括

上記の実践を通して，

i）情報保障の重要性への「気づき」の段階

ii）権利としての学習参加の充実の段階

iii）卒業後の環境に合わせて聴覚障害学生自らが必要な情報を要望・選択していく就労移行の段階

の各段階に合わせ，小型表示端末への字幕配信による情報保障，PC テイクによる情報保障，音声認識字幕による情報保障，手話通訳による情報保障，等，各段階に合わせた適切な支援の工夫の重要性が確認された。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 山本綾乃，二神麗子，<u>金澤貴之</u>，教育実習における聴覚障害学生の情報保障のあり方に関する一考察－４人の聴覚障害学生の実践事例から－，群馬大学教育実践研究，査読有，第 32 号，2015，109-114

② <u>金澤貴之</u>，実習における障害学生支援の課題－群馬大学における聴覚障害学生の教育実習の支援から－，リハビリテーション研究，査読無，第 44 巻第 2 号，2014，27-30

③ 上原景子，秋山奈巳，<u>金澤貴之</u>，<u>中野聡子</u>，ローリー・ラドキー，大島康平，小林量，萩原翔平，奥泉志帆，聴覚障害学生のための英語学習促進の支援–音声認識字幕を用いた教養英語における実践例を通して–，群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編，査読無，第 62 巻，2013，53-67

〔学会発表〕（計１件）

① <u>金澤貴之</u>，山本綾乃，ニーズに寄り添う聴覚障害学生支援とは–群馬大学の今までとこれから，日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム，2013 年 12 月 08 日，群馬大学荒牧キャンパス（群馬県前橋市）

〔図書〕（計２件）

① <u>金澤貴之</u>，生活書院，手話の社会学–教育現場への手話導入における当事者性を巡って，2013，全 350 頁

② <u>金澤貴之</u>，他，渡邉健治編著，クリエイツかもがわ，特別支援教育からインクルーシブ教育への展望（第 8 章　インクルージョンと聴覚障害児教育）205-221），2012，全 240 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

金澤　貴之（KANAZAWA Takayuki）

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：５０３２３３２４

(2)研究分担者

中野　聡子（NAKANO Satoko）

広島大学・アクセシビリティセンター・特任講師

研究者番号：２０３５９６６５